

押しよせて来たる夕闇 一連の山脈のあを空に溶かせる

アルプスの朝日の雲海を翼とし山男の兄飛び去りゆくか

田中 薫

六月号・秋山智恵子

日々にまぶしき雨を褒めあえどきつと異なる

その雨の色

クリシユナ智子

幼児の墓に供える桜餅黒い揚羽が翅を休める

たてがみの雨の雲を光らせる生き残るもの生きねばならず

八月号・鷺沼あかね

数人の男の声が聞こえて向かいの家が五日後消える

九月号・今井 洋子

一年間私の作品評にお付き合いくださいまして、誠にありがとうございました。年間を通して注目していた方々を紹介します。

技巧を効かせた卓抜な表現で注目したのは、中西由起子さん、桐谷文子さんです。高山邦男さんは社会詠、職業詠、介護詠など多岐に渡る主題を深く掘り下げて詠んでいました。クリシユナ智子さん、佐々木寛子さんは中年女性の微妙な心境をうまく掬い取つて詠んでいて、共感する歌が多かったです。

山下雅人さんは個性的で自由な発想の切り口で詠み、読者を楽しませてくれました。全体的に数が少なかつた職業詠で注目したのが、笛本碧さんです。旅行業者の方の作品というのは、今まであまり見たことがありませんでした。ですから歌壇の新境地を開拓するつもりで、これからも歌い続けているほしいと思います。相聞歌の数も少なかつたです。そんな中

で注目したのは、清水あかねさん、吉野美野里さんです。「銀河」や「おおぞら」を比喩に用い、スケールが大きい中にも、搖れる纖細な心理を詠み込んでおり、神秘的な相聞歌として、心に残りました。

そのほか、佐久間得幸さん、鳥山順子さん、細溝洋子さん、加賀谷実さん、渡辺はるかさん、久松宏二さん等の作品も読み応えがあり、何度か毎月の作品評で採り上げさせて頂きました。

ここで「秀歌の条件」をもう一度考えてみたいと思います。

以前、幸綱先生が「短歌には『内容で勝負する歌』と『表現で勝負する歌』がある」と書かれていたのを読んだことがあります。今回私が選んだ作品も、そのどちらかで勝負されている作品がほとんどです。自分も今までその観点で作品を見てきました。しかし、今年の「心の花」十月号の時評に、佐佐木定綱さんが、幸綱先生が全国大会で話されたことを踏まえて、「意味のない歌」

の必要性について書かれていました。

確かに、歌集の連作の並びが、意味のある、重い素材のものばかり続いているらしく、歌を作りやすいのも、事実です。人の心を打つのは、挽歌、相聞歌など「内容で勝負する歌」です。

「意味のない歌」を歌う方が、はるかに難しいことだと思います。また自分自身、「意味のない歌」にあまり魅力を感じていないのも、事実です。

しかし短歌ではありませんが、昨年度大ブームを起こしたビゴ太郎の「P.P.A.P」も歌詞に意味はありません。それでも、あれほど大ヒットしたのですから、やはり「意味のない詩」の魅力というのも、あるのだと思います。それが現代短歌の新しい境地を開拓するかも知れません。次からはそのような考え方も視野に入れて作品を読み、「意味のない歌」の魅力も伝えられる歌人になりたいと思います。